

PURE 4

C o n t e n t s

P U R E 4 5

特別番外編
神であっても 289

PURE 4

1 白薔薇を髪に

「ここです。百ちゃんが落ちた場所」

崖の下を覗き込みながら、早瀬川愛美は自分に寄り添うように立っている不破優誠に教えた。

「ずいぶん深い」

崖下をじっと見つめていた不破は、静かに口にした。

ここは、愛美の親友である桂崎百代が足を滑らせて落ちた場所。愛美が生まれ育った山の家の近くだ。先ほど早瀬川の墓地に行き、母の墓参りをした。その帰りに滝を見に来たところ、不破が百代の落ちた場所を見たいというので、ここにやってきたのだ。

三日前のクリスマスの日、愛美は百代と、この山の中を散策していた。そのとき不破はアメリカにいて、愛美は滝のところから彼に電話をかけた。

百代はちよつとぶらぶらしているとひとりで小道を歩いて行って……そして、愛美が不破と携帯で話していると、百代の悲鳴が……

あのとときの恐怖がそのまま胸に蘇り、足が震える。

本当に怖かった。百代を早く救わなければと、それしか考えてなくて、結局、百代を助けなけれ

ばならない立場の自分が、足に怪我を負ってしまったのだ。

何か思わぬ事態に遭遇したに違いないと、不破は日本に飛んで帰ってきてくれた。本来ならアメリカで家族とクリスマス休暇を過ごすはずだったのに……

まったく、わたしってばなんて軽率だったんだろう。死にかけて、父や不破に、ひどく心配をかけたしまった。

「貴方が怪我をしたのは？」

崖下を覗きながら考え込んでいた不破が、顔を上げて問いかけてきた。

「もう少し先です。下りる場所を探して……」

百代を助けようと無我夢中で下りた場所まで、愛美は不破を連れていった。

こうして、彼と一緒に肩を並べて歩いているなんて、夢のことにように思える。

出血多量で死にかけてたものの、輸血を受け、その後の経過も順調だったため、もう退院できた。

もうすぐお正月だし、早く戻ってこられて本当に良かった。嬉しいことに、不破はこのまま山の家滞滞することになったのだ。愛美は湧き上がる喜びを噛み締めた。

「ここ……ですか？」

息が詰まったかのような苦しげな声で、不破はその言葉を口にした。

尖った岩があちこちに突き出ているし、斜面というよりは崖。……見るからに危険そうだ。

まったくよく下りられたものだと自分のことながら思う。

でも、あのとときは、百ちゃんが心配で、もう必死だったから……

「貴方は勇気がある」

彼女は思わず微笑んだ。あれは、勇気とかそんなのじゃない。

「あのときは、そんなこと考えていられたかったから。……えっ？」

愛美は仰天した。不破が何も言わず突然崖から飛び降りたのだ。右足を斜面に滑らせながら、不破が下りてゆく。愕然とした愛美は、一瞬身動きができなかった。

「ゆ、優誠さん！」

「大丈夫です」

崖下にしゃがみ込んでいる不破が、安心させるように答える。

「な、なんてことするんですか？」

あまりにびっくりさせられて腹が立ち、愛美は地団太を踏みながら大声を出していた。

立ち上がった不破は、愛美を見上げ、おかしそうに微笑む。

「もおつ、笑ってる場合じゃないです。怪我したらどうするつもりだったんですか？」

「怪我などしていませんよ」

「していたかもしれないですよ！」

「ですね」

憤りに駆られ、叱るように言葉を飛ばしているというのに、不破は涼しい顔でいる。もどかしくてならなかった。

「桂崎さんが落ちた場所まで歩いてきます」

不破は言い、愛美が辿ったのと同じ道を歩き始めた。

崖下を歩く不破の姿は、愛美の胸を熱くした。彼女は不破を見つめながら、小道を戻った。

「ここでしたか？」

「ええ。そのあたりです」

不破は百代が落ちたあたりを、何かを探すかのように眺めたあと、元の場所まで引き返した。

崖を上がるのに、不破は愛美ほどは苦労しなかった。崖を登ってきた不破は、彼女に触れそうなほど近くに立った。

愛美は不破の汚れた身体を見つめ、口元を硬くして彼の顔を見上げた。

「優誠さん……なんでこんな無茶なこと……怪我したらどうするんですか？」

「貴方の無茶を、体験したかったんです」

不破の言葉に、愛美は息を止めた。

彼女は不服の意を込め、彼の胸を手のひらでトンと押した。

「……ど、泥だらけですよ……」

愛美は涙声で言い、不破の言葉を待った。だが、彼は何も言わず、ただ愛美を見つめてくる。

彼の青い瞳を見つめていると、胸が苦しくてならなかった。

「まな」

不破の囁きが、耐え切れないほど胸を震わせる。

顔をくしゃくしゃにしてぼろぼろと涙を零し、愛美は泥だらけの不破の身体を力いっぱい抱きし

めた。

「眼鏡を探しましょう」

その提案に、愛美は顔を上げずに頷いた。

「足は痛みませんか？」

俯いたままの愛美に、不破は顔を寄せて視線を合わせてきた。そして、指でそっと涙を拭^{ぬぐ}つてくれる。

「大丈夫です。ゆっくり歩きます」

不破は頷いて腕を差し出してきた。愛美は彼の腕に腕を絡めて寄り添った。

「強い意思を持って探すんですよ」

屈み込むような姿勢で、地面に視線を向けながら不破が言う。あまりに真剣な表情をしている不破を見て、愛美は笑みを零した。

目を凝^こらして小道の隅々まで探しながら帰り道を辿ってきたのだが、愛美の眼鏡は見つからない。不破からプレゼントされた特別な眼鏡だ。なんとしても見つけ出したかったのだが……

愛美はがっかりしたため息をついた。もう見つからないのだろうか？

「また明日、探しましょう」

無念そうに不破が言い、愛美は気を取り直して頷いた。

これで諦めることはないのだ。また明日、探せばいい。

「ですね。眼鏡を探しながらなら、散歩の楽しみが増えますね」

小道から庭へと戻ったが、不破は家に向かわず、愛美を連れて車道のほうに進んでいく。

「優誠さん、どこに行くんですか？」

「この道の先にもうひとつ道がありましたが、あの道を進むと、この山を越えられるんですか？」

「この先には、採^{さい}土場があるんです。明日にでも、行ってみますか？」

「ああ。そこで採^{さい}ってきた土を、陶芸に使っているわけですね？」

「ええ。あそここの土の匂い、わたし、とても好きなんです」

「楽しみだな。それで、そちらにあるのは、採^{さい}土場だけですか？」

「いいえ。細い道がいくつもあって……わたしのお気に入りの場所もあちこちにあるんですよ」

「すべて行ってみたいですね。……連れて行って欲しいが……その道は、あの滝への道のように、

歩くのが大変なんでしょう？」

愛美は道のりを思い返し、きゅつと唇を曲げた。

「しばらくは……自粛したほうがいいみたい」

その返事に不破は微笑み、頷いた。

「貴方の足の傷の回復を待ちましょう」

不破は愛美ごと回れ右をし、玄関に向かった。

玄関近くまで来た愛美は、とんでもないものを発見して固まった。

動かなくなった愛美に、不破も足を止める。

「まな、どうしました？」

「あ、あれ……」

窯の側に置かれている作業机の上にあるのは……間違いなく……

不破が以前、愛美の黒縁眼鏡を探し出してくれたとき、いくら探しても見つからなかったのに、ふと気がつくと、誰かがそこに置いてくれたとしか思えない場所にあったと言っていたが……ま、まさか、今度も？

「優誠さん、お、置いてありますよ……」

眼鏡を指さし、愛美は震える声を上げた。だが不破は笑みを見せ、否定して首を振る。

「まな。……たぶんこれは、前のときとは違いますよ」

「ち、違う？」

「きつと、徳治さんでしょう」

不破は工房に歩み寄ってゆき、ドアを叩いた。

「なんだ？」

父のくぐもった声が聞こえ、ほどなくドアが開いた。

「どうした？」

「眼鏡を探し出してくださいさったんですね？」

「ああ。さつき、墓参りの帰りに見つけたんだ」

不破はくすくす笑い、愛美のほうに振り向いた。

「やはり、今度は違ったようですよ」

不破の言葉に、愛美は吹き出した。

「いったい何の話だ？」

怪訝な視線を向けてくる父に笑いかけながら、愛美はなんでもないというように首を横に振った。「だが、壊れてるぞ。新しいのを買うよりないな」

愛美は羨まれて頷いた。確かに、フレームが曲がってしまい、レンズもひとつ外れてしまっている。残念だが、修理できる段階ではなさそうだ。

「まな、明日、買いに行きましょう」

「はい。お願いします」

愛美の返事に対して笑みを見せた不破は、徳治に視線を向けた。

「工房の中を、見せていただけませんか？」

「ああ。入れ」

あっさり承諾し、工房の中に入りかけた徳治だったが、動きを止め、また不破に顔を向けた。

「優誠君」

「はい」

「何があった？」

「はい？ あ、ああ。これですか？」

自分の汚れた服をさし、不破は聞き返す。

「まさか……君も落ちたのか？」

「いえ。桂崎さんの落ちた場所に、下りてみただけです」

徳治は数秒黙り込み、ようやく口を開いた。

「そうか。おい、愛美」

「はい」

「風呂が沸いている。入ってこい。傷を濡らさないように気をつけるんだぞ」

「わたしは後でいいわ。優誠さんに先に入ってもらったほうが……」

「いいから入ってこい。優誠君、入ってくれ」

「はい」

返事をした不破は、愛美に向かって頷き、工房に入ってしまった。

ふたりと一緒に工房に入りたかったのに……

つまらない気分だったが、愛美は壊れた眼鏡を取り上げると、父の言いつけどおり風呂に入るために家の中に入った。

父の気遣いか、風呂場は十分に温められていて、愛美はさほど寒い思いをせずに風呂に入れた。

風呂から上がった愛美は、父の声を聞き、台所に顔を出した。

「わたしがやるのに」

水色のエプロンをつけた不破が、愛美の声に振り向いた。

以前、桃色のエプロン姿の不破を見て、呆気にとられたことを思い出し、愛美は吹き出しそうになった。この水色のエプロンも、ずいぶんとよく似合う。けれど不破は、自分のエプロン姿をさほど気に入ってはいないようだ。たぶん、父に言われて仕方なくつけたのだろう。

「優誠さん、お風呂に……そ、そうだ、汚れたズボンは……履き替えたんですか？」

いまさらながらに思い出し、愛美は尋ねた。

「ええ」

「それじゃ、ズボンの泥を落とさないと……それに食事の用意もわたしが……」

「愛美、いいからお前はおとなしくしている。私と優誠君で事足りる」

「で、でも。もう大丈夫だし……」

「優誠君、その棚の大皿を取ってくれ」

愛美の言葉を聞き流し、父は不破に指示した。

「はい」と答えた不破は、きびきびと動く。

どうやら、おとなしく父の命令に従うしかないようだ。

「ほら、こんなところに立っていられたら邪魔だ。居間のソファにでも座ってる。無理をしてると熱が出るかもしれんぞ」

愛美は仕方なく頷いた。近づいてきた不破に背を押され、彼女は台所から連れ出された。

「まな、部屋に運んでおきましたから」

歩きながら不破が言い、彼女は意味がわからず首を傾げた。
運んでは……？

「何を？」

「忘れたのですか？ 約束したでしょう？」

「愛美はきよんとして不破を見返した。……いったい？」

「ドレスです。まな、着てくださるのでしょうか？」

愛美は顔を固めた。そ、そういえば、そんな話に……。とても着られないと言おうとしたが、甘く期待するような眼差しを食らい、何も言えなくなった。

「わ、わかりました」

不破は嬉しげな笑みを見せ、愛美を彼女の部屋の前まで連れていった。

「では、楽しみにしています」

期待いっぱい笑顔を残し、不破は台所に戻っていつてしまった。

ドアを開けた愛美は、足元に置いてある箱を見つめ、思わずため息をついた。膝をついてしゃがみ込み、ドレスの入った箱の蓋を開ける。

純白のドレス……

手を伸ばしてやわらかな布地に触れ、ドレスを箱から取り出す。

これを見て、父と不破の前に出てゆかなければならないのか？ なんとも痛い気分顔が歪む。

まったく不破は、とんでもないことを望む……

それでも彼女はそのドレスを身に着けた。とても手触りの良い生地で、身体にぴったりフィットし、腰から裾まで美しいラインを描いている。ドレスは素晴らしいが、彼女に似合っているのだろうか？ ウエスト部分が少しゆるいが、見ておかしいほどではないようだ。それよりも、胸の部分がぴっちりすぎているように思えて、こちらのほうが気になる。

顔をしかめつつドレスの裾を持ち上げた愛美は、足元にあるふたつの小箱に目を向けた。

えつと……これは、確か……？

しゃがみ込んで小箱を手に取り、両方とも蓋を開けてみた。ネックレスとイヤリングだった。

これもつけて欲しいということのようだ。すでに愛美の首には誕生日に不破からもらった白薔薇のネックレスが下がっていたが、彼女は開き直った気分です。ネックレスを重ね付けした。鏡に映して確かめてみると、シンプルな白薔薇のネックレスと豪華なデザインのネックレスはどちらも銀色で、そんなに違和感はないようだ。愛美は自分の姿に笑いを堪えながらイヤリングをつけた。

髪に櫛を通していた愛美は、ふと思いつき、机の引き出しを開けた。奥にしまいこんでいたピロイドの箱を取り出すと、愛美は手のひらに載せ、そっと開けた。

不破がくれた婚約指輪。こんな高価なものを、留守にするアパートに置いてはおけないと思い、持ってきたのだ。

輝きを放つ石を見つめて、愛美は様々な思いに浸った。長いこと指輪を見つめたあと、彼女は左手の薬指に指輪をはめた。

身支度をすべて終えたものの、照れが湧き上がって愛美はなかなか外に出てゆけなかった。困った彼女は、その場に座り込み、不破のことを考えた。

彼は、秘密はもう欲しくないと言った。不破にまだ知らせていないことがあっただろうか？

蔵元家と父のことは、愛美も不破が知っているのと同じ程度の情報しかないし……

愛美は目を上向けて、天井を見つめた。

そうだ、不破に佐藤知樹というひとのことを尋ねてみなければ……

彼は不破の仕事の補佐をしているひとだ。愛美のもうひとりの親友である藤堂蘭子の姉、橙子は、この知樹のことを好きらしいのだ。そのことを、不破は知らないはず……

彼は、橙子が好きなのは保志宮だと思おうと前に言っていたし……実のところ、愛美も以前はそう思っていたわけで……

「まな」

不破の声に、愛美は座り込んだままでドアに顔を向けた。

「は、はい」

ドアがゆっくりと開いた。愛美は、ドアのところに立っている不破を、頬を赤らめて見上げた。

「お、おかしくないですか？」

強烈な照れくささから焦りが湧き、愛美は早口に問いかけた。不破は無言で部屋に入ってくる。

愛美に近づいた不破は、跪き、彼女をそっと抱きしめてきた。

「ゆ、優誠さん」

「よく似合う」

「ほんとに？」

「ええ。実のところ、理性が飛びそうです」

その言葉は、愛美の耳元で甘く囁かれた。

首から上が急激に熱を持ち、心臓がバクバクした。……愛美のほうが理性が飛びそうだ。

彼女から身を離れた不破は、部屋の中に飾られている花の中から一輪の小さな白薔薇を手折り、愛美の髪に飾った。

不破は何も言わず、愛美の瞳を覗き込んでくる。

「ゆ、優誠さん」

沈黙に耐え切れず愛美は彼の名を呼んだ。不破はふつとやわらかに微笑む。

不破が唇を近づけてきて、彼女は静かに目を閉じた。

2 探す必要のないもの

この格好で、父の前に出てゆくのも、夕食をいただくのも恥ずかしいんですけど……

そう言いたいのを愛美はぐっと堪えた。すでに居間のドアは、目の前まで近づいてきている。

不破は愛美の部屋からここまで、彼女の腰に手を添え、おとぎ話の王子様顔負けの手際で、愛美

をエスコートした。プリンセスのような扱いを受け、彼女の頬は照れのせいでひどく赤らんでいるに違いなかった。なにせここは、愛美の家なのだ。違和感を感じて当たり前ではないだろうか？

不破はストラックスにシャツとセーターという普通の姿なのに、彼女だけ着飾っているなんて、滑稽すぎる。

「まな？」

「は、はい」

「どうしました？」

ドアノブに手をかけた不破は、動きを止め、愛美を見つめてくる。

「い、いえ、あの、その……は、恥ずかしくて……こういう姿、慣れてないというか……」

「心配いりません。とてもよく似合っている。不自然なところなど、ほんの僅かありませんよ」

愛美は内心ため息をついた。彼はそうだろう。だが、父は……

「こんなところに突っ立って、何をやっとする？」

父の声が背後から聞こえ、愛美はぎよつとして振り返った。

娘の姿を目にした徳治は、目を見張った。そりゃあ驚くだろう。これから特別でもなんでもない夕食を食べようというところなのに……こんなドレスを着ている娘を見れば、驚かないほうがおかしいというものだ。

「あ、あのお……」

愛美は顔の熱が増した。顔から火が出るとはこのことだ。

「まだ運ぶものがありましたか？」

父と娘の困惑ぶりに気づかないのか、不破は徳治に尋ねる。

「あ……ああ。これで最後だ」

徳治が手に持っているのは、何種類もの野菜を大量に載せた大皿だ。そのざく切りの野菜から察するに……今夜の夕食は……

「お、お鍋なの？」

「あ、ああ。旨そうな牡蠣があっただんで……」

愛美は思わず天を仰いだ。

か、牡蠣鍋に、イブニングドレス……おまけに髪には薔薇の花……

「徳治さん、素晴らしく、よくお似合いですよ？」

不破から問いかけられ、徳治は不破から愛美へと、視線を向けてきた。

愛美はどんな顔をしているのかわからず、頬を引きつらせた。

「今夜の夕食……お鍋だっでご存じだったんですよね？」

愛美は不破に、疲れた声で聞いた。

「ええ」

すつきりした笑顔で不破は答える。

夕食が鍋だと知っていたのに、彼は愛美にこのドレスを着せたのか？

お鍋にイブニングドレス。このありえない組み合わせに、なんの疑問も抱かない不破……

なんとも……恐るべきひとだ。すべてを受け入れた愛美は、笑いが込み上げてきた。

「恵依子が見たら、喜んだだろう……」

父の言葉に驚き、愛美は「えっ？」と叫びを漏らした。

「父さん……あの？」

「いや。きつと、見て喜んでるんだろうな」

苦笑してそう言い直した父を、愛美はじつと見つめた。

「そうだろうか？ 母は、愛美のこの姿を見て、本当に喜んでるのだろうか？」

「さあ、食うぞ。優誠君、ドアを開けてくれ」

頷いた不破がドアを開け、徳治は居間の中に入ってゆく。愛美はもどかしい気分で唇を噛んだ。

こんな服装でお鍋を食べるのは、やはりおかしい気がしてならない。着替えてきますと言いたいけれど、いまさら言い出せなかった。

「まな？」

ドアを開けたまま不破は愛美を促してくる。愛美は洩々部屋に入った。居間には、美味しそうな匂いが充満していた。結局、イブニングドレスで食卓につくことになってしまった愛美は、複雑な気分でお鍋を見つめた。男ふたりは鍋の支度で忙しく、彼女の思いになど、まるで気づかない。

「ナプキンが必要ですね」

不破の言葉に、愛美はドレスを見つめた。

「確かにそのままじゃドレスが汚れそうだな。タオルを持ってこよう」

そう言って立ち上がろうとする徳治に、不破は「私が」と言い、部屋を出ていった。父とふたりきりになり、愛美はこれまで以上に気まづくなった。

「あ……あの……」

「よく……似合うぞ」

「え……？」

愛美は息を止めた。まるで泣くのを堪えるように、徳治が目頭をぐっと押さえたのだ。

「お、お父さん？」

「ああ……なんでもない」

なんでもない様子ではなかった。愛美は思いを口にしてくれない父に、もどかしさを覚えた。

「お前は、恵依子の自慢の娘だからな」

徳治は、それだけ言い、胸からあふれそうになった多くのものを、すべて自分の中に収めてしまったように思えた。父が口にしないすべての思いを聞きたいと、こんなに強く思ったことはない。

「お父さん？」

「なんだ？」

「いつか、すべてを話してくれる？」

徳治は口を開かず、じつと愛美を見つめてきた。

「いますぐでなくてもいいの。でも、いつか話して」

「……わかった」

重く父は言った。

「ありがとう。……たぶん……お母さんも、それを望んでいると思うから」

この約束を確かなものにしたくて、愛美は父に言った。

部屋がシンと静まり、徳治は場の雰囲気を変えようとしてか、軽く咳払いをした。

「優誠君……遅いな」

その言葉を聞いたかのようなタイミングで、ドアが開き、不破が入ってきた。

不破が持つてきてくれたタオルを受け取り、愛美は膝に置いた。

「もう食べるぞ、食べようか」

ぐつぐつという音を発する鍋に、ふいに気づいた様子で、徳治は箸を手にとった。

アンバランスな服装であっても、鍋は美味しくいただけた。不破は過ぎるほど世話を焼いてくれ、愛美は父の手前照れくさかったが、彼がやりたいだけの世話を素直に受け入れた。

片付けもふたりがやってくれ、そのあと父と不破は順番に風呂に入った。不破が風呂に入っている間、愛美は壁際に据えてある横長のソファに座り、時を忘れてツリーを見つめていた。

「まな」

部屋の入り口から声をかけられ、愛美は不破を振り返った。彼女の姿を味わうように見つめながら、不破はゆっくりと近づいてくる。

「お父さん、どこに行ったのかしら？」

風呂から上がった徳治は、不破に入るよう呼びにきて以降、居間に戻ってきていない。

「外に行かれたようです」

「外？」

愛美はパチパチと瞬^{またた}きた。この真冬の夜に……？

「ダウンジャケットを着込んでおいででしたから、風邪を引いたりはなさらないでしょう」

いったいどこに行ったのだろうか？ 工房だろうか？

ああ、もしかすると……墓地に？

「まな？ ストープの前で話ませんか？」

不破はそう提案し、愛美に手を差し出してきた。シンデレラにでもなった気分、愛美は不破の手を取った。魔法の助けを借りて舞踏会に出かけたシンデレラは、王子様に踊りませんかと手を差し出されたとき、きつといまの愛美と同じように、甘い胸の震えを感じたに違いない。そして、十二時の鐘の音を聞き、魔法の消滅に恐れ^{おそ}を抱き、シンデレラは慌てて王子様の前から逃げ出した。シンデレラに王子様の愛を信じる勇気があったのなら、逃げ出したりせず、真実の自分を……

「まな？」

不破に導かれるまま、ストープの側まで来て、燃える炎を見つめていた愛美は、彼の声に我に返った。彼女が考え込んでいたからだろう、不破は問うような眼差しを向けてくる。愛美は無言で首を横に振り、炎の前に彼と並んで腰かけた。不破はすぐに愛美の背中に左腕を回し、彼女をそっと抱き寄せる。

不破と初めて逢ったときの愛美は、本当の自分ではなかった。魔法の力を借りたシンデレラだった。二度目のときだって、本当の彼女じゃなかった。だけど……三度目に逢ったときの愛美は、ただの愛美だった。それどころか、泥だらけで彼の前に現れたのだ。不破は数え切れないほど多くの見目麗しい女性たちと出会ってきたに違いない。それなのに……彼は真実の愛美を愛してくれた。彼は、愛美のどこが良かったのだろうか？　どんなところを好きになってくれたのだろうか？

愛美は左手を伸ばし、不破の手の上に手のひらを重ね、握り締めた。薬指の指輪がストープの火に照らされてまばゆい輝きを放つ。指輪に気づいていたのか、それともいま気づいたのか、不破は何も言わぬまま、愛美の左手を自分の大きな手で包むように握り返してきた。

「愛した理由など……探しても、見つかりはしませんね」

愛美の言葉に、不破は少し首を傾げ、それから愛美の好きなやさしい笑みを浮かべた。

「探す必要はありません……心は知っています」

愛美の手を自分の口元へと運びながらそう口にした不破は、きらめく指輪に軽くキスした。

3 ゆるぎない未来への前進

「結婚しましょう」

その言葉は、突然不破の口から転がり出た。触れ合わせるだけだけれど、過ぎるほど甘いくちづ

けをしたばかりだった。キスの余韻に潤む目を見張り、愛美は息をするのを忘れて、彼の瞳を見つめ返した。彼の目は本気だ。

「貴方が卒業するのを待つて、三月の終わりに……」

愛美は繰り返し瞬きし、はじめのショックから抜け出した。

「で、でも、優誠さんのご両親、まだ……」

「私は成人した男子ですよ。両親の許可をもらわずとも結婚できます。貴方は未成年ですが、徳治さんさえ了承してくだされば、結婚できます」

確かにそうかもしれないけど……

「ご両親が反対されているのに……」

「三月まで、三ヶ月ありますよ。説得する時間は充分にあります。そんなことはないと思いますが、万が一賛成してもらえずとも、結婚してからわかってもらえばいいことです」

そんなふうに簡単に考えてしまっているものだろうか？　愛美はとても賛成できなかった。

「でも……」

「あの家に住むつもりはありません」

「えっ？」

「貴方が望むのであれば、私はあのアパートで徳治さんと一緒に暮らしても構わないし、あそこが手狭であれば、もっと部屋数のあるマンションを探すというのでも……。そのあたりは徳治さんと相談しましょう」

不破があん古いアパートに住む？ あ、ありえない……
愛美は困惑が増した。

「わ、わたし……でも、四月から父が教授をしている大学に通うし……」
「教授？」

戸惑った表情になった不破を見て、愛美は瞬きした。
も、もしや……父が大学の教授だということ……まだ彼に告げていなかった？

「徳治さんは、陶芸を教えていらっしやるとのことでしたが……まな、大学の教授をなさっているのですか？」

「そ、そうです……造形学部の陶芸科……で……」

とんでもなく後ろめたい思いが湧き、愛美は気まずく不破を見つめた。

「い、言ってませんでしたっけ？」

「まな。……まったく、徳治さんも……」

不破は笑いを込めて疲れたような息を吐き出した。

「ご、ごめんなさい。でも、秘密にしたとかじゃ……」

「わかっていきますよ。だが驚かされました」

「す、すみません」

不破は、愛美の手を握り締めている手に力を込めた。

「やはりまだ秘密がありましたね。まだありそうだと感じていたのですよ」

その言葉には冗談の響きがあつて、愛美はほつとした。

「徳治さんは、陶芸教室を営んでいらっしやるわけではなく、大学の教授。そして貴方は、四月から徳治さんが教授をしている大学に入学する？」

頷く愛美を見て、不破は何を考えたのか眉を寄せた。

「貴方がいま通っている高校も、入学予定の大学も蔵元家が経営している学校……。まな、貴方は四月に転校してきたと言っていましたね。ということは、そのとき徳治さんも？」

「はい。そうです」

「徳治さんが、どうして蔵元の家を出られたのか、貴方は聞いていらっしやるのですよね？」
突然話が変わり、戸惑ったものの愛美は頷いた。

愛美の父が、蔵元家の長男だったことを彼女が知ったのは、ごく最近のこと。そして、蔵元三次は、なんと父の異母兄弟であり、彼女の叔父だった。

陶芸の道に進みたかった徳治は、蔵元の家を出て、母方の伯父である早瀬川周明の養子となったのだ。

「ええ。まだ話してくれません。話して欲しいとは言ったんですけど……」

「徳治さんの実弟である蔵元君は……当然すべてを知っているのでしょうか？」

「そう思います」

「過去に何があったのかはわかりませんが……。徳治さんは蔵元の家と、いまは和解を望んでいらっしやるわけか……ならば……」

愛美はきゅつと眉を寄せた。

和解を望んでいる？ お、お父さんが？

彼女は当惑して、ストロブの炎を見つめている不破の顔を覗き込んだ。

「ゆ、優誠さん？」

「なんですか？」

「和解って？ 父が望んでいるって？」

「そうでしょうか？」

逆に問われて戸惑いが増す。

「どうしてそう思うんですか？」

「徳治さんが、いまの教授の任を引き受けられたからですよ」

「そ、それは、前の大学をクビになったから……きつと、父の知り合いの誰かが、口を利いてくださって……」

愛美は父の恩師である、麻生教授を思い浮かべながらそう言った。

「まな、私には、そう思えませんが」

愛美は戸惑いつつ、眉を上げた。

「どうしてですか？」

「クビになったというのが、真実はわかりませんが……和解を望んでいないのであれば、暮らしに困っていないのに徳治さんが蔵元家のものである大学の教授を引き受けられるとは思えません」

「暮らしに困っていない？ そ、そんなことは……」

「困っていたというんですか？ お金がない時期があったと？」

そう問われて愛美は困った。確かに、以前の大学を辞めてからの数ヶ月の間、月の生活費を父が滞らせるなんてことはなくて……

愛美の心は考えを進めることに、不安定に揺れた。父が無職になって、お金に困っていると思っていたのは、彼女の勝手な思い込みだったというのか？

「やはり、蔵元君と話をする必要がありそうですね」

「蔵元さん？」

「彼がすべてを知っていると……いまの大学に徳治さんを招いたのは蔵元君ではないかと、私には思えるんです」

「そ、そう难道でしょうか？」

「ええ。たぶん」

「そ、そう……？」

いま不破の口から語られた言葉が、やはり真実なのか？

「徳治さんは、蔵元君の招きに応じた。それはつまり、蔵元家に歩み寄ろうという思いがあるということでしょうか？」

「そ、そうですね。そうなのかも……。蔵元さん……父に、蔵元家に戻ってもらって……」

それを聞いた不破は、渋い表情になった。

「優誠さん？」

「これは、結婚を急いだほうがよさそうだ」

「えっ？ ど、どうして？」

「まな、蔵元家まで絡んできて欲しくないでしょう？」

「問いかけられ、愛美は戸惑った。問われている意味がさっぱりわからない。」

「あの、いったいどういうことなのか、意味が……」

「不破家と、蔵元家の婚姻ということになれば……それがどういう意味を持つかわかりませんか？」

「不破家と蔵元家の……？」

「両家の結婚となれば、貴方が望まないような盛大な結婚式を、両家が執り行うだろうと思うからですよ」

愛美は顔を引きつらせた。

「そんなの困る。いや、困るところじゃない……と、とんでもないことだ！

「わ、わたし……」

「ですから、手遅れになる前に、貴方の望むような結婚式を、なるべく早く挙げたほうが良いと思
うんですが……」

「そ、それはもちろんだ。そう思う反面、ためらいが膨らむ。」

「結婚するの？ 三月に？」

あまりに性急な話で、心がついてゆけない。けど、不破と蔵元、両家関わっての大掛かりな結

婚式なんて……。め、眩暈めまいがする。

不破の苦笑する声が聞こえ、パニックに陥おちいっていた愛美は、彼に目を向けた。

「まな、困りましたね。徳治さんには、蔵元の家と和解していただきたい。だが……まな、私は貴
方の選択に任せることにしますよ」

「そ、そんなの任せないでください！」

不破の身体に思わずがみついた愛美を、彼は両腕を広げてふわりと抱きしめてきた。

「まな、安心して。いまこの場で選択しろと言っているわけではありませんよ。徳治さんの性格か
らして、蔵元の家と、そう簡単に和解なさるとは思えませんし……」

その不破の言葉は、愛美をこれっぽっちも安心させはしなかった。

「少しづつ、現実に向けて動き出しましょう」

「う、動き出すって？」

「もちろん、我々ふたりの結婚ですよ」

「け、結婚……」

「まな」

不破は愛美を胸に抱いたまま、少し顔を離して彼女と目を合わせ、甘い笑みを浮かべた。そして、
指先で愛美の頬に触れて、頬へと撫で下ろす。

「明日。眼鏡を買いに行くついでに、不破の家に行きましょう」

不破はなんでもないので、さらりと言って微笑んだ。

ふ、不破の家に！ あの城のような屋敷に……また行くのか？

一度訪れて、激しくなじられたあげく、あつという間に追い出された、あの屋敷に……不破はまた、愛美を連れていこうというのか？

「わ、わたし……」

「両親はまだアメリカにいて留守にしていますし……。私の部屋を、まなに見て欲しいんです。この間は、叶わなかったから……」

物思わしげな不破の言葉と表情に、愛美は二の句が継げなくなった。

胸の内のため息をついた愛美は、心に力を得るために、大きく息を吸い込んだ。

彼女は、自分の返事を待っている不破を見つめた。

愛美との未来を、ゆるぎないものにするために、彼は力を尽くそうとしている。

ならば彼女も……

愛美は、不破の手をぎゅっと握り返した。

城のような屋敷への訪問は、愛美にとつて大きな試練だが、これはふたりの未来への小さな一歩に過ぎないのだ。戻込みばかりしていたら、前に進んでなどゆけない。

「行きます」

愛美はためらいを捨てて、力強く答えた。

「そう言ってくださると思っていました」

彼はそう口にし、にこやかな笑みを浮かべたが、間違ひなく愛美の返答を危ぶんでいたはずだ。

不破の小さな嘘が、愛美の心をくすぐる。彼女は思わず笑みを零した。そんな愛美の瞳を覗き込み、不破は人差し指で愛しげに唇をなぞる。愛美の唇にジンジンとした痺れを残し、不破の指は離れた。

彼女は笑みを消して不破を見つめた。不破も真剣な眼差しで見つめ返してくる。

進んでゆこう。一步一步、前に……。その先には、不破とのゆるぎない未来があるのだから……

不破の唇を受け止めながら、愛美は彼の身体をぎゅっと抱きしめた。

4 開けた視界

目の前にそびえる、別世界のものごときか思えない建物を前に、愛美は激しい後悔を覚えていた。バーゲンのだの五割引だの張り紙など、どこにも貼っていない、高級感漂う店……

不破は、愛美の馴染みの眼鏡屋があればそこに行きましようと言ってくれた。だが、あの田舎町の庶民的すぎる、バーゲンのだの五割引だの張り紙をやらガラスに貼っている店と不破とはギャップがありすぎる。だからどうしても、その店に行くとは言えなかった。

スーツではないカジュアルな服——高級とつけなければならぬが——を着た不破なのに、彼の発するオーラは、どうしたって消しようがない……

『すみませんが、優誠さん、ここではそのオーラを消してください』『はい。わかりました』なんてかけた会話が、混乱した愛美の頭の中で繰り返される。愛美に合わせれば不破が浮き、不破

に合わせれば、愛美が浮くのだ。不破は、愛美に合わせることを嫌がったりしないが、本当のところ、彼だつて自分の馴染みの場所のほうがか心地良いに決まっている。

「まな、どうしました？ 入りましょう」

「は、……はい」

できるならば……気後れしてたまらないこの心を、この場に置いてゆきたい。

まるでその心の動きに気づいたかのようなタイミングで、不破の手がすつと動き、愛美の背にやさしく当てられた。強引ではないものの、抗えない促しに、彼女は諦めて歩みを進めた。

広々とした店内は、贅沢に空間を使い、愛美のよく知っている店のように、所狭しと眼鏡のフレームが並んでいたりはしなかった。それぞれのスペースには、各ブランドのロゴマークが表示されている。それを目にした愛美は、ガチガチになるほど緊張した。この店のものすべてが、愛美に視線を向けられることを拒んでいるような気がしてならない。そして、店内に散らばっているスーツに身を包んだ数人の店員と、ひと目で別世界の住人とわかるお客たち……

「不破様」

凜とした男性の声が響き、愛美は思わずびくりと身を震わせた。その震えを感じたのだろう、不破の手が、彼女をなだめるように背中をそつと撫でた。

「ようこそ、おいでくださいました」

「ああ。この間は世話になったね」

「とんでもございません。お役に立てたようで、嬉しく思っております」

「実は、あの眼鏡が壊れたんだ」

「それで、修理を？」

「いや、残念だが、修理も無理なくらい壊れてしまつてね」

「そうでございますか。それでは、また新しいものを？」

「ああ。頼むよ。今日は本人も連れてきた」

「そうですか」

男性の視線が愛美に向き、彼女の緊張はさらに強まった。

「お嬢様、ご来店ありがとうございます」

「は、はい」

頬を染めた愛美は、しどろもどろな返事をした。自分の無様さが恥ずかしく、さらに頬の赤みが増す。

「ご本人様がいらしてくださつてよかつた。これで、びつたりのものをご提供できます」

商業的だけれど、温かな笑みを浮かべ、店員は言った。

印象も対応もとても良いのに、言葉を受け取るたびに、胸の鼓動が高まってゆく。馴染めないと思ひ込んでいるが故の、不必要な緊張なのかもしれないが……

「お願いします」

愛美は自分に呆れつつ、小さくお辞儀をした。

「それでは、いくつか検査をさせていただきたいので、こちらへお願いいたします」

「コンタクトレンズのご使用は、考えていらっしゃるのですか？」

店の奥にある検査用のスペースで視力検査を終えたところで、店員が言った。

「コンタクトですか？」

「コンタクトをお使いになったことはありますか？」

「いいえ。ずっと眼鏡で……」

「それでは、試されたことも？」

「はい」

コンタクトはお金がかかると思うからという言葉が胸にあっただが、もちろん口にはしなかった。

「一度試されてみてはいかがですか？」

「君は、眼鏡を売るのが仕事なんじゃないのか？」

それまで検査の様子を黙って見ていた不破が会話に混じってきた。

店員が、これまでにないほど親しげで明るい笑みを浮かべる。

「もちろん眼鏡もお薦めしますよ。コンタクトを使用しても、眼鏡は必要ですから」

「なんだ。両方購入してもらおうという魂胆か？」

不破が苦笑混じりにやわらかく言い、ふたりは声を上げて笑い合った。

ふたりの笑いにつられて愛美も笑みを浮かべたが、緊張が残っているせいで、ぎこちないものになった。

「まな、どうします？ コンタクトを試してみますか？」

笑顔のふたりを見つめ、愛美は反射的にこくりと頷いていた。なんともいい感じの空気がこの場を包んでいて、断れる雰囲気ではなかったこともあるが、正直、コンタクトにも興味がある。

コンタクトは、愛美が懸念していたような違和感など、ほとんど感じなかった。眼鏡をつけていないのに、何もかもがはつきりと見える現実には、愛美は感激した。

「す、すごいです。周りが明るくて、何もかもがキラキラして見えます。眼鏡してないのに……」

感激しすぎた愛美の滑稽な言葉に、店員は抑え切れなかったのだろう、小さく吹き出した。

「も、申し訳ありません。とても素直な感想だったので……」

店員は、吹き出したことを失態と思っただけで、必死で込み上げてくる笑いを収めようとしている。そんな店員の様子にツボを突かれたのか、不破も笑い出した。

「優誠さん！」

愛美は顔を赤くし、唇を尖らせて不破に不服の目を向けた。

「すみません。だが、私が笑ったのは、まなの愉快な発言に対してではありませんよ」

「も、申し訳ありません」

「いや、気にすることは無い。まなの発言は、確かに面白かったのだし……」

「優誠さん。やっぱりわたしのことを笑ったんじゃないですか」

不破はむっとして睨んでいる愛美の頭にそっと手のひらを置いて、顔を覗き込んできた。

「快適なようで、よかった」

甘い響きの言葉を不破からもらい、愛美の不服は消し飛んだ。

「それじゃあ、あとは？」

「はい。そちらの個室で、診察を受けていただきます。あとは、眼鏡のフレームをお選びいただければ、明日にはお渡しできるような、手配させていただきます」

「優誠さん、ありがとうございます」

店を出て車に乗り込んですぐ、愛美は不破にお礼を言った。

「貴方に何かできることが嬉しいんですよ。その気持ちが高じて、迷惑をかけてしまったりします
が……」

愛美は不破に向かって微笑んだ。

クリスマス朝、彼女をビックリ仰天させた、あの大量の花のことを言っているのだろう。

「お花、嬉しかったです。途方もない量で……百ちゃんが泊まって、朝起きたら周りが花だらけで、一瞬、百ちゃんの仕業かって疑っちゃいました」

車をスタートさせながら、不破がくすくす笑う。

「確かに桂崎さんというひとは不思議を現実にしてしまう力があるように感じますよ」

車は道へと出て、左に進路を取った。車の乗り心地、そしてこれまでにない開放的な視界に、本当ならば抱えたすべての緊張を解いて、高揚感に駆られてはしゃぎたい気分だったが、愛美の緊張は増しこそすれ、消えてはくれなかった。次の目的地のせいだ……

これから不破の家へ行くのだ。考えれば考えるほどに胃がシクシク痛む。だが、どうしても乗り越えなくてはならない山。愛美は不安と怯えを退け、不破との会話に集中することにした。おしゃべりしていれば、気がまぎれる。

「不思議な力を、実際彼女は持つてるものだから、もうなんでもやれちゃうんじゃないかって思ってます……」

顔をしかめている愛美を見て、不破が小さく吹き出す。

「だって、ヤマ勘なんてものじゃない、予知みたいなのはしょっちゅうだし……優誠さんと出会った日も……」

「あの日に、何が？」

不破が濃い興味の色を浮かべた声で聞いてきた。

「パーティからの帰りの車の中で、わたし……知らない間に涙が出てきちゃって……」

不破と橙子の縁談について語られたことで、心に受けた衝撃、そしてあの日の苦しく切ない思い。胸にツクンと痛みがさした。

「それで？」

不破はそつと話を促してきた。

「そしたら、百ちゃんが、わたしの額に手のひらを当てたんです。それから、優誠さんと公園のベンチで逢うまで、優誠さんの記憶が、完全に封じ込められて……」

「それですか！」

不破が大きすぎる叫びを上げ、愛美はびつくりした。

彼は急せくように言葉を続けた。

「あのときの貴方は、私のことをまるで知らないような反応をなさっていた。……私は……なんと
いうのか……」

前を見つめている不破の表情に、ひどく苦いものが浮かんた。

「私との出逢いも、あの忘れられないキスも……酔よいが醒めるとともにすべて忘れてしまわれたの
だ……」

不破は一瞬黙り込み、口元を強張こわばらせた。

「途方に暮れました……。いや、そんな生易なまやしいものじゃない、絶望……。貴方にどうやって思い
出してもらえばいいのだろうと……」

愛美は思わず彼の腕に触れた。

「でも、ちゃんと思い出しました……」

「そうでしたね。思い出してくださいました」

不破は気を取り直そうとするように、大きく息をついた。

「桂崎さんは、本当に貴方の記憶を封じ込めたんですか？ いったいどうやって？」

「よくわからないけど……。百ちゃんは、自分がしたんじゃないって。わたしに必要なことが起こ
つただけだって、言っていました」

「必要なことだったのでしょうか？」

不破の問いに対する答えを探しながら、愛美はあのとき頭の中に存在した、もやもやの感覚を蘇よみが
らせていた。あれはなんとも奇妙な感覚だった。彼女は思わず額ぬかに手を置いた。

ひどいもどかしさに囚とらわれた一週間……けど、おかげでわたしは……

「そう思います。優誠さんと次に逢うまでの一週間、わたしは苦しまないですみました」

「……そうか」

深い思いがこもった、不破の短い返事だった。

5 無条件の信頼

「まな、緊張してますね」

「……は、はい」

不破の気遣うような問いに、愛美は嘘がつけなくて正直に答えた。

「心配いりません。今度は、私は貴方から一瞬たりとも離れるつもりはありませんから」

愛美は運転している不破の横顔を見つめた。彼が自分のほうをちらりと向いてきたので、愛美は
「はい」と返事をしつつ頷うなづいた。

それでも、やっぱり萎縮いしゆくしちゃうんです。世界の違いを感じて……と、愛美は心の中でだけつけ
加えた。それを口にしても、不破にもどかしさを味わわせるだけだ。

「上島は……貴方に謝罪したがつていました」

上島？ あのひとだろうか？ 初老の礼儀正しい紳士。とても人の良さそうなひとだった。

「謝罪なんてこと、必要ありません。あのときは、仕方がなかつたんです」

彼の両親と会うために愛美は不破の屋敷に行った。そして、まず不破がひとり父親と話すということになり、その間、不破は愛美を上島に託した。なのに、愛美が連れていかれた先に、なぜか不破の父がいて……愛美はそのまま屋敷から追い出されてしまった。

「上島には、落胆しました」

冷たい言葉に、愛美は驚いて不破を見つめた。

「優誠さん……」

「いくら父に逆らえなかつたとはいえ、彼は、貴方が私にとつて、どれほど大切な存在かを、はっきりと理解していた」

「わ、わたしも感じました。わたしに対して、申し訳なく思つてくださつてるの……伝わつてきました……」

落胆という言葉が気にかかり、愛美はできる限り上島を庇つた。

「両親の誤解は、まだ解けていないんです」

不破は疲れたような吐息をついた。彼の両親は、息子は橙子のことを好きだと信じているのだ。いくら彼が否定しても、聞く耳をもたないらしい。

不破の両親と祖母のことは、愛美も気にかかつてならなかつた。不破はクリスマスを家族と過ご

すはずだったが、愛美が危機に陥つたことを知り、日本に駆けつけてくれた。彼が戻ってきてくれたことは、もちろん涙が出るほど嬉しかったが、彼女のせいで、せっかくの家族水入らずのクリスマス休暇は、おじやんになってしまったのだ。不破の両親が、いま現在、今回の事情をどれだけ知っているのかわからないが、愛美のせいであることには変わりない。

「誤解を解く機会がないまま、私はアメリカに発つてしまつて……。貴方も知つてのとおり、知人の家で両親と落ち合うはずだったので……ふたりが到着する前に、私は帰国したので……」

「帰つてきてくださつて嬉しかったです」

「そうですね……」

運転している不破の手が伸びてきて、愛美の手をぎゅつと握り締める。彼女は不破の横顔を見つめた。

「誤解などいつかは解ける。いまこうして貴方の側にいられることのほうが大切だ」

交差点に差しかかり、不破の手が離れた。愛美は進行方向を見つめて、目を見開いた。

えっ？ この場所つて？

「優誠さん……優誠さんの家に向かつてたんじゃ」

「留守にしていた隠れ家の様子を覗いてからと思つて……」

「ああ。そうでしたか」

あの城のような屋敷にまだ向かつていないと知り、愛美は思わず安堵した。

「お掃除しないといけませんね」

安堵を感じたせいで、愛美の声が明るさを増す。

「ええ」

愛美は目の前に現れた不破の隠れ家のあるマンションを、懐かしさを込めて見つめた。前回ここに来たのは、不破が再びアメリカに発つという日。あれからまだ十日ほどしか経っていないのだ。あまりに色々なことが起こりすぎて、まるで数ヶ月ぶりのような気がした。

目的の階に着き、愛美は彼女の肩を軽く抱いている不破と、歩みを揃えてエレベーターから降りた。部屋へと足を向けた不破が、唐突に足を止めた。同じく立ち止まった愛美は、その理由をすぐには悟った。

佐藤……知樹……さんだ。

ドアの前に立った知樹は、ふたりに貫くような視線を向けてくる。愛美は恐れを感じて小さく震えた。しばらく立ち止まったまま、知樹を見つめていた不破だったが、愛美に顔を向け、了解を得るように、小さく頷いた。

彼は愛美を促し、ゆっくりと知樹に近づいていった。

「帰ってきたのか？」

「貴方が帰国したとの知らせを受けましたので……」

「どうして帰ってきた？」

「必要だと思ったからです」

「必要？」

冷たいあざけりの響きを込めて、不破はその一言を口にした。知樹は、無表情で不破の言葉を受け流し、愛美に鋭い視線を向けてきた。あからさまな敵意を感じて、彼女は身がすくんだ。

「紹介してくださいの不是吗？」

「必要と、思わないのでね」

知樹は何も言わず、ただ眉を上げた。

「貴方は、橙子様に好意を持っておられた。そういう意思をはっきりと見せておいでだった。真剣に結婚を考えていらつしやるものと、みなと同じに、私も思い込んでおりました」

知樹は不破に視線を向けて言ったが、その言葉は愛美に向けられているのだ。不破の目には、とてつもなく冷たい光があった。彼は愛美が想像もつかないほどの怒りを感じているようだ。その怒りを前にして、知樹が恐れるような色を浮かべたことに、愛美は気づいた。鼓動が急激に速まってきた。いまの不破は、彼女の知っている彼ではない。

「好意は持っているさ。彼女のことは実の妹のように……」

「誤魔化しとしか聞こえませぬね。そちらの女性の心に、不安の種を撒きたくないのでしょうか」
知樹は、かなりの無理をして、棘のある言葉を口にしてるように愛美は感じた。

何に突き動かされて、彼はその台詞を口にしてるのだろうか？

まるで、どんなに嫌でも、それをしなければならぬと思込んでいるような……

義務感……？ 何に對して？ ……不破の家？ 不破の両親？

不破の顔に翳りがさした。冷たい目をしているものの、知樹に対して、不破は落胆を……哀しみを感している。そう思えた。

「そうだな。彼女に出逢わなければ……彼女が私の人生に入り込んでこなかったとしたら……橙子さんとの結婚はありえたかもしれない。そう言えば満足か？ 知樹」

「事実そうではありませんか！」

知樹は、怒鳴るように叫んだ。

「貴方は愚かな間違いを犯しているんですよ。どうして気づかないんです！」

知樹はそう言うと、肩で大きく息をついた。

「恋というものがどんなものか……君は知らないだろう」

不破が静かに言った。不破の言葉に、知樹は怯んだようだった。

「うまくゆくはありますがありません」

「君に心配してもらわずともいい」

「育ちが違うんですよ。不幸になるに決まっているんだ。屋敷の者たちだって、納得しない」

不破の顔から表情が抜けた。

「納得？ 屋敷の誰が納得しないって？」

「み、みなですよ」

「私が、妻を、屋敷に仕える者たちの好みで、選ばなければならぬ立場とは知らなかった」

知樹が苛立ちを浮かべた。

「そういうことを言っているのでは……」

「そういうことだろう？」

「あ、貴方はわかっていない……」

知樹はそれまでとは打って変わって、弱々しい声で呟くように言った。

「いいか。よく聞け。私は彼女と結婚する。これは決して覆らない」

「一時の気の迷いですよ。貴方ほど理知的な方が、どうしておわかりにならないんです」

「もういい。知樹、我々は忙しい。用事がこのことだけなら、もう帰ってもらいたい」

「優誠様！」

「知樹」

「なんですか？」

「君には、私の補佐を降りてもらおう。後任は私が自分で探す」

不破の言葉に知樹は目を見開き、動きを止めた。数秒して大きく息を吸った知樹は、落ち着き払った様子で口を開いた。

「わかりました。……お好きになさるといい。だが、これだけは言っておきますよ。貴方はこの方を守り切れると思っていらいっしやるようだが、そんなことは不可能だ。貴方にはやるべき仕事があり、この方はその間ひとりきりになる。それがどういふことか、よくお考えになられたほうがいい」

「君に心配してもらわなくてもいい」

「……では、これで失礼します」

すつと踵を返し、知樹は硬い歩みで去っていった。知樹の姿がエレベーターに消えたのを見届けると、不破は隠れ家のドアに歩み寄った。知樹と同じほど表情を硬くした不破を、痛みを感じながら見つめていた愛美は、彼の背に癒しを込めて手のひらを当てた。

「まな、貴方に嫌な思いをさせて……」

「あの方、補佐を降りたからって……仕事がなくなったり、生活に困ったりしませんよね？」

キーを鍵穴に差し込んだところだった不破は、まじまじと愛美を見つめてきた。

「彼は、貴方の心配に値しますか？」

「佐藤さんは、言わずにはいられなかったんです」

知樹の最後の言葉は、哀しいけれど真実だろう。そしてそれは、もともと不破の世界に踏み込むことを恐がっている愛美の恐れを、さらに大きくした。

「知樹は大袈裟に考えすぎている。屋敷の者は、いいひとばかりです。なんの心配もいらぬい」

不破の取り成すような言葉にも、愛美の恐れは消えはしなかった。それどころか、不破の言葉は樂觀すぎる気がしてならず、彼女の恐れを強めた。不破と愛美では立場が違う。知樹が言ったように、育ちが違うのだ。それは、ふたりの間の埋められない溝となりえる。

「まな。どうぞ中へ」

不破の促しで、愛美は靴を脱ぎ、隠れ家の中に入った。止まっていた隠れ家の中の空気が、不破と愛美を迎えた途端、時を刻み始めたように思えた。

「綺麗にしていますね」

床にほこりはつもっていないように見える……

「留守にしていたのは、十日ほどですからね」

「そうでしたね。……なんだかも、あれから何ヶ月も経ったように思えて……」

心に重いしこりを感じていた愛美は、背後にいる不破にそれを悟られないように、無理やり明るい声を出した。

背後から、愛美は不破に抱きすくめられた。それは、単なるふれあいというのではなく……愛美の芯を震わせるような種類の抱擁だった。

「ゆ、優誠さん？」

「心配しないで。まな」

愛美の耳に唇を寄せて、不破は囁いた。

「私の言葉を信じて欲しい。私の言葉だけを……」

不破の乞うような言葉は、愛美の心を大きく揺さぶった。

「そうだ……」

愛美は背後から回されている不破の腕を、両手でぎゅっと握り締めた。

彼の言葉を、無条件に信じよう……

「わたしは大丈夫です。優誠さんを信じます」

「まな……愛しています」

胸が熱かった。父が以前口にした覚悟という言葉の意味と重さが改めて胸に迫る。

恐れは消えない……。けど……。いまのわたしは、きっとそれに立ち向かえる。
不破の腕に包まれ、溢れるほどの愛を感じながら、愛美は照れくささを押しやって「愛してます」と、囁くように口にした。抱きしめられた腕の、力が増した。

6 着信ラッシュ

不破の唇が、愛美の首筋に触れる。その接触はジンとした痺れを与え、彼女の身体の芯を、口にできないほど甘く疼かせた。愛美はその強烈な疼きに、思わず悲鳴を上げそうになった。

「お、お掃除……しないといけませんね」

彼女はうわずりそうになる声をなんとか押さえ込み、平静を装って口にした。だが、不破の熱い唇は、愛美の肌を這うのをやめない。

「ゆ、優誠さん」

焦りに駆られた声は、見事に裏返った。

「まな、貴方が欲しい……」

愛美は目玉が転がり出そうなほど目を見開いた。

数秒固まっていた愛美は、やっと我に返った。

目の渴きを感じて、彼女がぼちんと瞬きした途端、片側の目が急にぼやけた。

「あっ！」

違和感を感じ、愛美は左目を押さえた。

「まな？」

愛美の不自然な動きと叫びに、不破が顔を覗き込んできた。

「コ、コンタクトが、ずれちゃったみたいなんです」

「えっ？ 大丈夫なんですか？」

「わ、わかんないです。どこに行っちゃったんでしょう？」

「まな、こちらに向いて」

愛美は不破の手で身体を回されて、彼の真正面に向いた。

「左の目ですか？」

「は、はい」

左目を押さええている手に不破の指が触れ、愛美は手を下ろした。

彼は愛美のこめかみに触れて、瞳を見つめてくる。

「よくわからない。……どうしたらいいだろう？」

「一度外して、つけ直せばいいと……」

無意識に指先で瞼に触れた愛美は、ふいに違和感を感じなくなって、手を下ろした。瞼を開くと、視界が戻っていた。

「な、なおっちゃったみたいですよ」